

インドの婦人問題

—日本の過去と未来があって「現在」はない—

大 泉 博 子

在ニューデリー国連児童基金<ユニセフ>
計画評価官

1. インドで出会う婦人

日本人の旅行者がインドでたまたま出会う婦人とはどんな婦人なのであろうか。赤児を抱え、汚い髪とボロのサリーを着て、喰うための金をくれ、という乞食。男達の間混って、レンガを頭に載せて運び歩く建設労働者。言わずもがな、「みじめな女達だなあ」と旅行者は思うであろう。

ホテルに泊って、ホテル側とトラブルがあり、マネージャーを呼んだとする。すると、きちっとサリーを着こなした、わりと美しい女性が出てくる。「私がマネージャーのXですが」と言うと、たいていの日本人はびっくりするであろう。しかし、相手が女性だからソフトに解決してくれるかと期待していると、まったくそうではない。インド人男性とまったく変わらず、「いえいえ、悪いのはお客様の方です。私達は職員をきちんと訓練しておりますので」と反対にやり返されてしまう。仕事のやり方に男と女のちがいはそれほどないことを知らされるであろう。それは、言い換えれば、女性の側の職業意識の高さを表している。

さて、旅行者の子供が急に熱を出してホテルに医者を紹介してもらおうと、それは、殆どの場合、女医さんである。小児科医・産婦人科医の殆どは女性なのである。インドでは、伝統的に、女性が男性の医師にかかることは極端に嫌われていて、それ故に、女医の数がまた多い。デリーにあるマウラナ・アザト医科大学の例をとっても、医学部入学者の三分の一以上を女性が占める。そして、その女医たちは優秀である。

ビジネスや学究が目的でインドに来た人々は、政府高官や大学教授などに会う機会があるであろう。そして、かなり高い確率で、女性の政府高官、女性の教授に会うことができる。彼女たちは男性を圧倒する威厳と議論好きさなどで、日本の人々を驚かすことと思う。

もし、田舎に足を延ばす人がいれば、泥だらけの農民の姿に出会うであろう。男が来ればサリーの布の端きれで顔を被い、のべつ幕なしに働く女の姿がそこにある。五、六人の子供たちが彼女の回りにいるけれども、大きい子が小さい子の世話をしている。母親は父親と同じだけの労働をしたあとで、自分で作った牛糞の燃料を用いて、これま

た自分で数キロメートルも歩いて汲んできた水を使って料理を始める。見ていてもたいへんな労働である。彼女たちはとても老けていて、栄養のよくないことが目に見えてわかる。「どうしてこんなに働くのだろう。夫よりも働いている。あんなにたくさん子を生んで、体は疲弊している。めっちゃくっちゃだ」と彼女たちの姿を見た日本人は嘆息する。

こういろいろなインド女性を見ると、「インドの婦人問題とは——」と一括に論ずることができないのは当たり前になってくる。日本のように9割の人々が自分では中産階級に属していると考え、所得格差はあってもそれほど大きくない、という社会では、「日本の婦人問題は——」と言うことができよう。インドでは、泥だらけの農民のおかみさんと、デリーなど大都市で出会った女医さんとの間には、所得で言えば1日につき10対200（ルピー）、教育で言えば0対16（年）、文化的社会的存在としては一世紀もの隔りがあるであろう。

したがって、インドの婦人問題を論ずるときには、恵まれた階層の人々とそうでない人々とを明確に区別して扱わねばならない。インドでも、都市部には中産階級が存在しているが、概して言えば、上層階級と上層中産階級をひとつのグループ、下層中産階級と下層階級をもうひとつのグループとして分ければ、婦人問題に関する限りは正しい見方ができる。

上と下の相違はまず経済的に桁違いであるということである。上層20パーセントにある世帯が全インド世帯収入の49パーセン

トを占め、下層40パーセントにある世帯はその16パーセントを占めるにすぎない

(1975-76)¹⁾。ちなみに、インド政府が定義した貧困ライン以下に生活する者（その収入では一定カロリーの摂取が不可能な者）は人口の48パーセントとなっている。

しかし、上と下との相違は経済的なものにとどまらない。文化・価値に関しても大きな差がある。言うまでもなく、上の方は、欧米的合理主義を追求し、婦人の地位についても欧米の動向を遍く知っている。下の方は、原始的な農業者か都市部の極端な低賃金労働者であり、識字率36パーセント(1981)²⁾のカテゴリーに入らぬ人々であって、したがって、伝統的迷信的価値に盲目的に従う人々である。日本・インドを含め、どのアジア社会も、伝統的迷信的には、婦人の地位は低められていて、さまざまな形での虐待が行われている。

さて、本題に入る前に、この論稿の結論を先に言おう。インドの「上の方」の婦人は日本の現状をはるかに超えた状況にあり、日本の「未来」もしくは「あるべき姿」に近く、「下の方」の婦人は、遠い昔に去った日本の「過去」に生きた婦人の姿に近いということである。したがって、標題を「インドの婦人問題——日本の過去と未来があって現在はない」としたのである。

2. 数字から見たインドの婦人

インドの人口は7億3千万人³⁾。そのざっと半分が女なのであるが、男対女の比率は男の方が多いという状態にある。過去80年

海外の動き

間の統計によれば、常に男の数が女をしのぐという状態であった（表1）。現在の日本では、女の平均寿命は男のそれに比べ約5年も長く、女の数の多いというのは常識になっている。女1000に対する男の割合は969（昭和55年）である。⁴⁾しかし、日本がこのような状態になったのは1937年（昭和12年）のことであり、それまでは、男の数が女の数を上回り⁵⁾、除々にその格差を縮め、1937年にその比率が逆転したのである。

表1. 男女比率の推移

年	男1000対女の数
1901	972
1921	955
1941	945
1951	946
1961	941
1971	930
1981	935

出所：Census of India 1981

表2. インド人の平均余命(出生時)の推移

年	男	女
1901-11	22.6 (年)	23.3 (年)
1921-31	26.9	26.6
1941-51	32.4	31.7
1961-71	46.4	44.7
1981-86	55.1	54.3

出所①Health For All: An Alternative Strategy (ICSSR-ICMR)

②Economic Situation and prospects of India, World Bank 1982

したがって、女より男の数が多いという事実は、日本の過去にも見られたように、妊娠・出産がその国の医学水準及び社会的状況から見て、女の生命を脅かす状況にあることを語り、女子の成長、労働、周囲の社会慣習に短命を導く種々の要因があることが考えられる。

インドの場合、過去80年間の統計によれば、この男女比率に改善の傾向はまったく見られない。すなわち、今もって現代医学の恩恵を受けず、女子に不利なさまざまな社会的因習の下にある大部分の女たちの姿が浮かび上がってくる。人口の76パーセントが村落部に住むインドでは、他の世界と遮断されたまま女性の姿は前世紀然として変わらないのである。

この事実を裏付けるもうひとつの指標が男女の平均余命の推移（表2）である。20世紀に入って、全世界的な死亡率の低下の影響を受け、インドも平均余命を除々に延ばしつつあるが、女が男より短命である事実は覆されていない。婦人の健康面での近代化には、インドは程遠いところにある。

それでは、インドの女性はいつ、いかなる場合に死んでいくのか、それを表3で見よう。男も女も1歳までの死亡数はきわめて高く、全死亡の2割近くがこれに占められている。その後の年齢層を見ると、女は男との比較において、1歳から34歳までの死亡が多い。これは、幼少女期にあっては、男子に比べ栄養の摂取が低く、病気になったときに医療を受ける率が低いことによる。これに関する具体的データはないが、村落において、きわめて一般的に見受けられる

現象である。そもそも親が子供の数を言うとき、女の子は数の中に入れないのが普通であり、他家に嫁ぐ者に対する待遇はきわめて悪く、「一日も早く厄介払い」をすることが親の希望である。

こうした親の姿勢は、あとあとにまで影響してくる。すなわち、早婚を助長し、教育などは無駄と考える。早婚により、若くして子供を生み始める女たちは、未熟な体のため、即危険に曝されることになる。また、教育の低い女たちは、文字を通すなどして生活の改善をはかるといふ姿勢には至らない。15歳から34歳までの年齢層の死亡が男に比べて高いのは、こうした理由によるものである。

表3. 年齢別死亡数の配分 (パーセント)

年齢層	計	男	女
1歳未満	18.7	18.8	18.5
1-4	9.2	7.8	10.9
5-14	5.4	4.9	6.1
15-24	4.5	3.6	5.6
25-34	5.4	4.8	6.1
35-44	5.7	5.9	5.5
45-54	7.0	7.8	5.9
55以上	44.1	46.4	41.4
	100.0	100.0	100.0

出所: Survey of causes of death (Rural)

1980, Office of the Registrar General

表4は、男女の識字率に関するデータであるが、男女とも、教育の普遍化により徐々に伸びてきている。表からも明らかなように、女の識字率は男の約半分止まっている。当然のことながら、都市部の識字率は

村落部より高く、たとえば、デリーの女性識字率は52.6パーセント(1981)であり、一方、村落部が主体のラジャスタン州では、女性識字率は11.3パーセント(1981)と低い。したがって、識字率は年々改善されているとは言えるものの、村落部では進歩が遅いのである。

表4. 識字率の進歩 (1901-1981)

(識字者の全人口に対する割合)

年	計	男	女
1911	5.92	10.56	1.05
1931	9.50	15.59	2.93
1951	16.67	24.95	7.93
1971	29.46	39.45	18.19
1981	36.23	46.74	24.88

出所: Census of India 1981

表5は、インドの男女労働者の職業別人口配分である。言うまでもなく、耕作者(土地を持つもの)と農業労働者(土地を持たないもの)を合わせた農業が圧倒的多数を占める。特に女性の場合は、耕作者よりも、農業労働者の方が多く、土地を持たぬ夫と共に労働者として働かねばならぬケースが一番一般的である。

そうした女性は男と同様に働く。かてて加えて、家事労働は一人で負わねばならぬ。家事労働自体がまた大変な労働量を要する。遠い所からの水汲み、小麦粉を練ってのチャパティ(インドのパン)作り、川で洗濯し碇で打つ仕事、牛糞を集め手で練る燃料作り、乳のみ児に乳をやり、数人の子供の世話をする仕事——これらの仕事には夫は全

表5. フルタイムの職業別人口配分

(パーセント)

職業	男	女
計	100.00	100.00
農業 { 耕作者	43.70	33.20
農業 { 農業労働者	19.56	46.18
牧畜・林野業	2.34	1.85
鉱業	0.62	0.36
家内工業	3.18	4.59
その他の工業	8.92	3.55
建設業	1.81	0.80
商業	7.33	2.04
輸送業	3.32	0.38
その他のサービス業	9.22	7.05

出所：Census of India 1981

く参加しない。すなわち、労働者として夫と同じだけ働いた妻は、近代化の全くされていない家事を一手に引き受けなければならない。ある村落における調査によると、夫、妻、子の三者の労働割合は、31,53,16パーセントと、圧倒的に女の労働が多いことを示している。

以上が数字で見たインド女性の姿であるか、読者が冒頭で会われた農民の姿やスラムの女の姿は浮き彫りにされても、あのきちっとしたサリーを着ていた職業婦人の姿はまったく出てこない、という疑問をもたれるであろう。それもそのはず、数字は「大部分のインド女性」しか語らない。大都市にあって、責任ある仕事に就く女性の数は全体から見れば非常に小さい。しかし、それはインドが農業国である、という事実を語るにすぎず、一部の近代化された産業にかぎってみれば、女性の進出率が高いと

いう事実には誤まりはない。

3. 女性の社会進出

読者はすでに悲惨なインド女性の概要を知ってうんざりされたことであろう。ここで、全人口からみれば一握りではあるが、日本の現代の女性に比べればはるかに進んでいると思われるインド女性の社会進出に話題を転じたい。

インドのみならず、フィリピン、インドネシアなどアジアの開発途上国では女性の社会進出度が高い。ここで言う社会進出度とは、単純に労働マーケットに進出する人々を指すのではなく、一定以上の社会的地位を築くことのできる職業への進出度を言う。大学教授、医学博士、政府高官などがその例である。他に、財閥系会社又は大企業又は銀行などの管理部門なども含めらるべきであるが、インドにおいても、ビジネスの世界での女性の進出は決してはかばかしくない。しかし、大学教授など学問上の資格によりキャリアの決定するものについては、その進出度の高さには目を見はるものがある。残念なことには、筆者は進出度に関する数字をもたないので、正確な議論は次の機会を待ちたい。

ここでは、女性の社会進出を可能にしている理由だけを分析してみたい。

第一に、いかなるアジアの開発途上国においても同じであるが、家事労働者（サバント）の存在である。女性が家事から解放されることは社会進出の必須条件である。

第二に、拡大家族の存在である。都市部

では核家族も見られるようになったが、三代に伯父・伯母家族の同居という形態は今もって多く、子育て・家事を担当してもらうことは容易であり、かつ、家計に所得をもたらすことは大いに歓迎される。

第三に、特に上層中産階級の間では、インドで一般的なダウリ（娘の持参金）の代りに、娘に教育を受けさせるという傾向が強くなっている。その結果、女性は職業生活へと結びつくケースが多い。

第四に、都市部上層中産階級の生活には、夫婦がもたらす二つの所得を必要としているということである。

第五に、下位カーストの者は上位カーストの者の命令に慣れている。このことは、女性が管理職に就いたときに抵抗を少なくしてくれる要素である。

第六に、徹底した取りきめ結婚の存在によるところが多い。この要素は、筆者個人は大きなものとして考えている。なぜならば、結婚相手を多かれ少かれ親の選択に任ねている上層及び上層中産階級の娘たちは、自己のキャリアを築くことに精神を集中できる。きわめてよく勉強し、きわめて成績がよい。きわめて歯切れがよく、男女の相違を感じさせない。概ね親の取りきめた結婚に迷わず従い、若い女性特有の「孤独」や「不安感」をもつこともなく、学業を全うし職業生活に入っていく。結婚後については実はいろいろな問題があり、次章でそのひとつ、嫁姑の関係を述べるが、いずれにしても、職業生活に入るまでの時点では、およそ日本の女性ではかなわぬ良い条件の下にあると思われる。

第七に、インドは英語国であり、世界各地の英語で書かれた雑誌・文献は即入手できるという環境下にあつて、欧米の女性の進出を十分に知り得、教育の高い女性達に刺激を与えている。

以上の分析は筆者個人のものであるが、インドの知識層との議論との中で確信を深めたものである。

4. インドの嫁姑の関係

私は過去3年間近くの間30回にのぼるフィールド調査を行ったが、村落部の近代化を阻むさまざまな要因の中で、嫁姑関係というものがあることを痛切に感ずるようになった。

嫁に対する姑の存在は絶対であり、姑はその関係を通じて、科学的に誤まった迷信を嫁に伝えていく。たとえば、免疫を豊富に含んだ初乳を魔乳と呼んで新生児に与えない。乳幼児の下痢には水分補給が必須であるのに、水を与えない。そうしたことが乳幼児の生命を危険にさらす結果になっても、姑の言うことは正しいとされる。つまり、ヘルスワーカーが躍起となって科学的処置を教え歩いたとしても、姑の「やり方」が常に正しいとされているかぎり、健康面での改善は望まれない。

また、姑の嫁に対する支配欲は、若い嫁の健康と精神衛生を圧迫している場合が多い。村落部で一番ありうる問題は、嫁の持参金（ダウリ）が少なすぎるとして、嫁いびりをするのである。具体的には、嫁に食物を与えなかったり、夫に殴らせたりと

海外の動き

いうことが多く、日常の過重労働に加え、妊娠・出産の責任を荷い、若い嫁たちの健康は阻害されるばかりである。

ラジャスタン州のアルワー郡において調査したとき、多くの極端なケースが見られた。姑の命令で食物を一切与えられなかったある嫁（十代後半と思われる）は栄養失調にかかり、その体で3回の出産を試みたが、3回とも、新生児は栄養失調で死亡した。この女性は、貧困者対象のユニセフの活動に参加し、わずかの金を自分で稼いで、生命だけはつなぎとめていたのである。

また、同郡で、姑の命令で夫に殺されかけた嫁もいた。それも持参金が少ないことが原因であったが、殺人未遂に終り、それでもなお夫婦関係を続けている。

このような極端なケースにあっても、嫁は実家に戻ることはできない。生まれたときから厄介者とされてきた「女」は持参金とともに他家の人となり、決して戻ることには許されない。中には、初産がひどい難産で、新生児の頭を切り裂いて取り出したため、夫と姑の怒りを買ひ、離縁されたケースもあったが、この女性のケースでも、実家には戻らず、幸いにして村のヘルスワーカーとしての訓練を受け、ひとり立ちするに至った。

嫁姑の関係は凄じいと言えるほどである。疑問に思われるのは、姑もまたつらい嫁の立場にあった人間であるのに、一たん姑となるや、自分が虐待されたのと寸分変わらぬ方法で嫁に接することである。生まれ落ちたときから弱者であった女が、自分よりも弱い者を得て鬼と化する心理のようであ

る。

ラジャスタン州ウダイプール市の郊外での調査では、部落（村よりも小さな単位で150人位が共に住む）を訪れ、その女の人人々と地面に腰を下して話し合った。明るく話に加わる人、終始サリーで顔を隠している人などがいるが、明るい人は、多くの息子をもち、姑となって、人生が楽々になった女たちである。反対に明るくないのは、息子がいないか、独身ですごしたかで姑となれなかった女たちである。姑となることは、インドの女のつらい一生の中での唯一の夢なのだと思われた。

嫁姑関係は村落部だけの話ではない。これは上層階級も含め、インド全体の問題である。どんなに教養があり社会的地位を築いている女性であっても、こと姑に関する話となると、彼女たちの顔は例外なくこわばる。

インドでは、「他家に嫁ぐ」という観念が強く、嫁いだ以上はその家のルールに従わねばならぬ。だからこそ、宗教上の儀式や習慣を同じくする同一カースト内での結婚が行われているのであろうが、嫁にとっては、程度の差はあれ、他家の規律を熟知するまでの間は桎梏である。

嫁は基本的に実家に帰ることは歓迎されない。私の同僚の夫人（上層中産階級）は結婚して30年の間に、2回実家に帰っただけであり、それも泊まることは許されなかったという。若い世代では、むろん、この面では変化しているが、「夫の許し」を受けて実家に帰ることに変りはない。

一たん嫁となった以上は嫁家との付き合

いが重要であり、実家との付き合いは疎遠になってくる。実の娘が親の老後の世話をみるのはもっての外であり、それは嫁の役割である。そうは言っても、人間の感情として、病にあるとき、老母が実の娘の世話になることもままあるが、回復に向うとすぐに嫁の元へ戻るのが原則である。

私は、多くの知識階層の女性から、「私はひとり娘で、実の老母をひきとった。婚家に対して申し訳ない」とか、「実家を訪ねるときは何ひとつみやげも持っていけないのに、婚家の親戚を訪ねるときはあらゆるみやげを期待される」などという会話を聞くと、嫁姑関係、婚家というものの存在が深くこの社会に浸透していることを感じ

ざるをえない。

この問題については、アジアの国日本も同じなのかもしれない。しかし、現代の日本は核家族化し、女性の教育水準が上ったことを考えると、このような極端なあり方は「過去」のものとして語ってよいのではないか。

インドの社会、それは日本の過去と未来があって、現在は見られないのである。

- 注1) India Annual Report 1985 (UNICEF)
- 2) Census of India 1981
- 3) 1983年推計
- 4) 「日本の100年」国勢社
- 5) 同上